

巻頭言（2013年5月号）

理事長 新谷友良

「歌舞伎座のバリアフリー」

4月2日、新しい歌舞伎座がオープンしました。歌舞伎座のバリアフリーについては、協会は何回か松竹に足を運び、字幕と磁気誘導ループの設置を要望しました。そして、昨年松竹の担当の方が協会に来られ、字幕装置の準備はするが、磁気誘導ループの設置は難しいというお返事でした。ループが設置できない理由としては、歌舞伎はマイクを使用せず、役者さんの生の声を楽しむものという伝統芸術の誇り・こだわりを説明されました。

オープンから2週間、たまたまチケットがあったので、柿（こけら）落とし公演の第1部を見ました。以前の歌舞伎座の雰囲気は大切に残されていますが、やはり新しい建物で、内装も現代的で豪華なものです。1階席は幾分広くなった感じですが、2階席はあまり変わりがなく、前の席に当たって足を組んで見ることはできません。1階から3階までゆったりしたエスカレーターとエレベーターがあり、廊下には段差がなく、車いすの方も何人か見かけました。

問題の字幕ですが、タブレット型のモニターの貸し出しで、1、2階は前の席の背もたれに取り付けることができます。3階は膝の上に置いてみるという説明でした。モニターの大きさは15cm×8cm位で集中してみる分には問題ないですが、舞台とモニターを交互に見ながら利用するには少し小さく感じました。この方式は国立能楽堂でも同じですが、舞台から目を離し、うつむいてモニターを見るのはあまり良い方法とは思えません。舞台の上部か袖に字幕表示があれば、役者の演技と字幕を同時に楽しむことができるのに、とってしまいました。字幕の内容は、決まったセリフ通りのもので、読みやすく感じましたが、役者が花道に入ると字幕表示をしない、と説明があり、「???'」でした。

全般的にはそれなりにバリアフリーな歌舞伎座ですが、今後利用者の声を聞きながら、もう一歩進んだ歌舞伎座、公共施設になっていくのか、歌舞伎座関係者だけではなく、利用者の努力も求められると感じました。字幕モニターの写真を添付します。

